The Japan Association of College English Teachers (JACET)

「共感」と「ダイクシス」

——Come と Go に焦点を当てて——*

村角洋子

1. 序

英語における移動の動詞，come と go はこれまで主に2つの観点から分析されてきた。Fillmore (1966, 1972) によって明らかにされたダイクシスと，Kuno & Kaburaki (1977) を中心に打ちたてられた empathy (「共感」) の両観点からである。ところがダイクシスによってのみでは，これらの動詞のもつ，より微妙な用法について，その根本にあるメカニズムまで言及されておらず，従って満足のいく説明が与えられていない。一方「共感」における説明は，「共感」という概念説明に対する補足的な部分でとどまっており，come と go を主体にした詳細にわたる分析は行なわれていない。そこで当論文では，この2方面からの分析を再検討し，come と go の用法の説明として何が最も適切であるか探ってみた。その為に「ダイクシス」と「共感」の概念の最も根本的な部分を比較検討し，両概念の特性，特質を把握した上で，come と goはむしろ「共感」の概念を取り入れて説明する方が，より多くの用例を，より適切に説明でき，有効な方法であるという結論を導き出した。従ってその過程で「ダイクシス」と「共感」の基底概念を検討し，提示することも必要条件であり，当論文の目的の一つとなっている。

1. 1. 2方面からの分析

何故 come と go が，2つの側面から説明されてきたか。「共感」理論と「ダイクシス」理論の言語的レベルは，明らかに異なるものであるにもかかわらず，そこには何らかの共通点，相違点があるのであろう。

Come と go は基本的に，話し手，聞き手及び第三者の移動を表わす。従って，それは話し手及び他者の発話時の位置と深い関係がある。Tanz は，come と go が方向的な要素を持ち，特に会話参加者の位置によって明確にされ，かつ限定されるので，ダイクシスのもつ性質と関係していると述べている (Tanz, 1980 : 108)。つまり，発話の場面と密接に関連し，その状況を反映する。これ

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

らのことからも come と go がダイクシスの方面から分折されてきたのは当然と言えよう。

一方，これらの動詞の使用に関しては，視点の問題，perspective の問題も深く関わっている。つまり話し手が聞き手の，又は他者の視点をとらねばならない場合が生じてくる。従って come と go のダイクテイックな度合はむしろ固定的ではなく，弱く，他の deictic terms に比べ，確固としていない。これらのことからも，又我々が具体的に come と go の使用の実際例を考えた上からも，「共感」理論が出されるのもむしろ当然と言えよう。

2. Fillmore による come と go の基本的用法とその問題点

Fillmore (1972 : 6) によれば，

"(A) For GO, it is assumed that the Sender is not located at the Goal at coding time.

(B) For COME, it is assumed

(i) that the Sender is at the Goal at coding time;

(ii) that the Sender is at the Goal at arrival time;

(iii) that the Addressee is at the Goal at coding time;

(iv) that the Addressee is at the Goal at arrival time."

というのが基本的な条件として提示された。これによれば，

(1) John will come to the department tomorrow. (Fillmore, 1972:1)[1)]

の文が適格文となる為には，上記の 4 つの条件のいずれかが満たされなければならない。

この他，ホームベースの観念，同行文の場合，思考動詞，伝達動詞の補文中の come と go，第三者的記述の場合などの条件をあげている。ところがこれらをもってしても，説明しきれない例がある。

まず第 1 に，come と go の両方成立しうると考えられている場合についてデリケートな説明がなされていない。例えば，

(2) He'll *go* to the office tomorrow to pick me up. (Tanz, 1980 : 109)

(3) He'll *come* to the office tomorrow to pick me up. (Tanz, 1980 : 109)

で，話し手が発話時に到着点 (office) にいない場合，このいずれも可能になってくる。又，話し手が一年間の放浪の旅へ出発しようとしている時，聞き手をさそう場合に，

(4) Would you like to *go* (along)? (Fillmore, 1973a? : 17)

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

(5) Would you like to *come* (along)? (Fillmore, 1973a? : 17)

のいずれも可能であると Fillmore は述べている。

第2点目は，話し手にとって，全くの第三者的地点間の移動を表わすが，come と go のいずれを使用してもよいとはいえない例がある。例えば，話し手が川崎に住んでおり，その人生の大半を川崎で過ごし，鹿児島，静岡には住んだことがないとしよう。

(6) Mr. Saito will *come* to Shizuoka from Kagoshima. (Ogura, 1978 : 89)

(7) Mr. Saito will *go* to Shizuoka from Tokyo. (Ogura, 1978 : 90)

これらの文は，話し手にとっての第三者的地点間の移動であるから，Fillmore の説明によれば，come と go いずれを用いてもよいことになるが，実際には上記のような選択が適格であろう。これは果して何をもって説明されうるだろうか。

最後に，思考動詞，伝達動詞の補文中の come と go について，主節の主語の視点で動詞の選択が行なわれることは説明されているが，到着点に聞き手及び話し手が結びつけられている時には，むしろ話し手及び聞き手の視点で動詞が選択される。ところがこの点に関する Fillmore の説明は不明瞭である。

3. 「共感」と「ダイクシス」

ここで Fillmore の理論の根底となっている「ダイクシス」理論と「共感」理論をみていくことによってその本質を比較検討し，come と go の用法説明に適用する基礎を作っていきたい。

3. 1. ダイクシス理論

ダイクシスの概念は一般に，「話し手を中心として形造られる指示空間体系」と定義づけられているが，このことはダイクシスの概念がいかに発話の場面と密着しているかを表わしている。

そこで更にダイクシスの特性をあげると，まず第1は，deictic terms はそれ自身だけでは存在しえないと言える。つまり，deictic terms をそれのみだけ示し，具体的に説明しようとしても，それは不可能である。それらは必ず context の中で，又 discourse の中でその機能を果たし，意味づけが行なわれるのであって，単独では成り立ち得ない。このことは，それらがいかに発話の場面に密着しているかということを表わしている。

第2の点は，ダイクシスの概念というのは必ず話し手が中心となっていると

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

いうことである。deictic terms は，話し手が発話の場面を基準とし，話し手を中心とし，あくまで話し手の領域感覚や，時間的感覚，それに伴う心理的感覚を中心に選択されるのである。従ってダイクシスの最も基本的な概念は,「話し手が今，ここで発話行為を行なっている」つまり *now-and-here* ということである。ここには話し手の ego の認識が無意識の内にも表わされている。我々はこの世の中の事象をまぎれもなく我々個々の人物のそれぞれの目を通してみているのであり，自分自身を中心として造られる指示空間体系は，まさに話し手中心，話し手側の見方となるわけである。

3. 2. Empathy 理論

Empathy 理論は主に Kuno & Kaburaki (1977) によって導入されたもので，一般に「共感」「感情移入」などと訳される。彼らはこれをカメラアングルという方法を用いて説明し，同じ事柄でもカメラアングルの違いによって表現のされ方が異なることを説明した。彼らの定義によれば "Empathy is the speaker's identification, with varying degrees, with a person who participates in the event that he describes in a sentence" (Kuno & Kaburaki, 1977 : 628) ということになる。

彼らはこの理論に関していくつかの原則を打ちたてたが，それに対し Ogura 氏[2]は，何点かの問題点を指摘し，新しい原則を修正案として提案している。その主な特徴としては，Empathy 理論が話し手の発話時の心理と深く関わっていることを明示し，文の表層構造のもつ感情焦点と，話し手の内的感情が表わす共感度を二分し，その相互関係を示したことであろう。これによって，I lent Mary's husband a bicycle.[3] Then, *Mary's husband*$_i$ hit *his*$_i$ friend.[4] 及び object-centered verbs[5] をうまく説明することができる。そこで当論文では，この Ogura 氏の理論を中心に，若干の修正を加え，以下の原則を中心に取り扱うことにする。

(D) Empathy

共感とは，文によって記述されているでき事及び状態の関与者に対し，話し手が発話時にもつ心理的近さ (psychological closeness) の度合。

(E) Empathy Hierarchies (EH)

Inner Feeling Empathy Hierarchies (IFEH)——話し手の内的感情を表わす EH。

Surface Structure Empathy Hierarchies (STEH)——ある文又は句の表層

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

構造によって表わされるEH。

1. subject-centered verb　　主格＞与格
2. object-centered verb　　主格＜与格
3. passive form　　主格＞by＋人

(G) The Ban on Conflicting Empathy Foci I.

文の表層構造によって表わされる STEH が話し手の IFEH と矛盾した場合，その文は，非文法的，あるいは容認性が低い。

(H) The Ban on Conflicting Empathy Foci II.

1つの文において，相互矛盾する STEH をもつことはできない。

3. 3. 「共感」と「ダイクシス」

ここまでで empathy 理論と「ダイクシス」理論が両者とも話し手の視点に深く関わっていることに気づくと思う。ここでは両理論の根本に流れる概念を比較検討してみたい。まず第1に，ダイクシスと egocentrism の関係について考え，更に「ダイクシス」と「共感」を比べてみる。

これまで見たように，ダイクシスの基本的概念は非常に話し手中心，話し手側のものである。このことは egocentrism と関係がある。Tanz は，幼児における deictic terms の習得について研究したが，その中で deictic terms の使用と理解においてダイクシスの根本概念と egocentrism が密接に関連しているのを認識した。又他にも「this/that, here/there, I/you は話し手の perspective によって produce される。従ってその理解は nonegocentric な視点が要求される。」と述べているものがある。[6)]

もう一度発話の場面を考えてみる。発話が行なわれる時，参加者によって role-switching, turn-taking がなされる。それに伴って我々は必要な時に応じ，視点をも switch しているわけである。我々大人は何かを話す時，自分自身の視点で物を見，言いたいことを表現する。そして聞き手は，このことを充分承知の上でその発話を理解することになる。これには我々は大きな意識も払わず，視点の switch, turn-taking の操作を行なっているわけである。ところが子供はある時期になる迄，これがうまくできない。大人は複雑な視点を頭の中で自動的に操作できるが，子供にとってはこれも学習しなければできないことなのである。

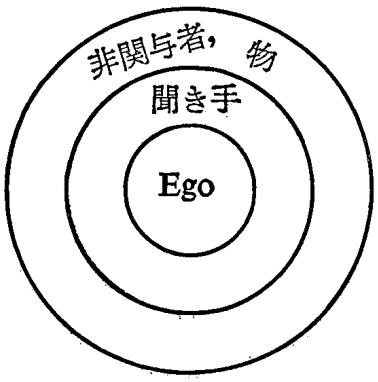
このように聞き手が話し手の視点にたって理解しなければならない典型的な場合が，deictic terms である。聞き手は decentering することによって，話

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

し手を理解する必要がある。従って deictic terms がいかに egocentric であるかということがわかる。

では「ダイクシス」と「共感」とはどのように関わり合っているのか。前述の通り，ダイクシスとは話し手中心の概念である。つまり話し手と他者の区別が明確なのである。一方，「共感」の概念は，話し手の心理状態，内的感情と深く関わっている。そして基本的には誰に，又は何に共感してもそれは話者の自由である。特に第三者ばかり登場する文では，自分自身の枠を越えて，第三者に共感することが多いつまり話し手と他者との区別はむしろゆるやかで柔軟性がある。それだけ話し手自身への固定化の度合が低いのである。



このような相違点がある一方，両者には見逃せない共通点もある。つまり我々が発話をする多くの場合，我々は我々自身の目を通してこの世の事象を見，表現する。つまり自分自身をすべての中心として見ている。従って選ばれることばも表現も自分中心となる。つまり話し手が自分自身に共感するのは一番自然であり，その場合ダイクシスの根本概念—話し手中心—とも一致するわけであり，両者に共通点が見られるわけだ。

又もう一点，両者の関係を提示すると，前述したように，我々が会話をしている際，視点を switch しながら他者の発話を理解する。例えば，A が "this table" と言ったものは，A の視点から見て "this なのであり，向かい合って離れて座っている B にとっては "that table" なのである。それを B が A の意図しているものを理解できるのは，B の中で decentering，つまり自分自身の視点からの離脱を行なっているのである。もっと積極的に言うなら，A に共感することによって理解できるのである。つまり，我々が deictic terms を聞き手として理解できるのは，「共感」という作業を無意識のうちに行なっているからなのである。

4. Empathy 理論に基づいた分析

このように「ダイクシス」と「共感」は非常に深い関わりを持っている。両者は相反するものではなく，相互補助的な関係といえよう。Come と go の用法においては，他者の視点をとる場合があることからしても，自分と他者の間の境界に柔軟性をもつ「共感」理論を用いて説明すると更に多くの用例の説明

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

が可能になろう。Fillmore の説明しえなかった点をも含めてここで分析していく。

4. 1. 原則 (I) (II)

まず，3.2 で見た共感の定義を一部修正し，come と go にも適用できるものとする。

(D)′ Empathy

共感とは，文によって示される場所及び存在物に対して，話し手が発話時にもつ心理的近さの度合

ということができ，更に come と go の基本的原則は以下のようになろう。

(I) Come は，発話時及び到着時における話し手又は聞き手への移動，及び，発話時及び到着時における話し手又は聞き手のホームベースへの移動を表わす。

(II) Go は，発話時及び到着時に，話し手又は聞き手から離れた人物，場所への移動を表わす。

なお (I) のホームベースとは，

「基本的に到着時に話し手あるいは聞き手がいると予想される度合の高い場所，又は話し手あるいは聞き手の住んでいる家」

ということである。つまり話し手，聞き手の territory（領域）と考えられる度合の高い所，ということが言える。この原則に基づいて，移動の動詞の重要な要素である移動者と到着点にいる者を，話し手，聞き手，非関与者に分け，各々の移動を表わす場合，選択される動詞がどちらになるか検討してみた。（表参照）これによれば，話し手及び聞き手，又話し手及び聞き手のホームベースへの移動が come で表わされることがわかる。このことはつまり，

到着点＼移動者	話し手	聞き手	非関与者
話し手		come	come
聞き手	come		come
非関与者	go	go	go come

＜表 1＞

到着点＼移動者	話し手	聞き手	非関与者
話し手のホームベース	go*	come	come
聞き手のホームベース	come	go*	come
非関与者ホームベース	go	go	come go

＜表 2＞

* は，話し手も聞き手も発話時にそのホームベースにいない場合を意味する。

話し手の IFEH の高い人，場所への移動は come で表わされるということで

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

ある。要するに，come は話し手が共感している所への移動の時使われる。特に注意すべき点は，話し手が聞き手及びそのホームベースへ移動する場合には話し手が聞き手に共感する形になることだ。[7] ところが以下の三種の移動を表わす場合に，(I)，(II) のみでは説明しきれない。

(a) 非関与者→話し手のホームベースへの移動

(8) While all of us are away, Ann is kind enough to *come/go* to inspect my house from time to time. (Ogura, 1978 : 84)

(9) Ann will kindly ??*come/go* to my house to pick up the car tomorrow.[8] (Ogura, 1978 : 84)

(b) 聞き手→話し手のホームベースへの移動

(10) Hello, I am at the airport now. I am not sure if I turned off the space heater. Could you please *go* to my house and check it for me? (Ogura, 1978 : 95)

(c) 話し手→彼自身のホームベースへの移動

(11) I *went* to my office early this morning and worked a whole twelve hours. (Ogura, 1978 : 97)

これらの場合にはすべて，話し手のホームベースへの移動である為，(I) によって come が使用されそうであるが必ずしもそうではない。

5. 2. 仮説 (III) (IV)

これらを説明する為に更に以下の仮説をたてる。

(III) Come は話し手が共感している場所への移動を表わす。

(IV) Come が表わす STEH は，

移動の到着点＞移動の出発点

この仮説によって (8) (9) は，家に話し手がいない為に到着点（ホームベース）への共感度が低くなり，逆に話し手が発話時にいる場所，及びアンがいる場所への共感度が高くなる為，come の可能性がそれだけ低くなる。又 (10) では話し手の IFEH は二通り考えられるが

① 話し手が発話時にいる場所＞話し手の家

② 聞き手＞話し手の家

いずれによっても go が選択される。(II) における IFEH も，

話し手が発話時にいる場所＞彼の office

従って (III) (IV) より go が用いられることになる。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

一般に，話し手が彼自身に，及び彼が発話時又は到着時にいる，又，いた場所に，かなり高い度合で共感するのは当然である。更に話し手が発話時又は到着時に住んでいる，及び住んでいた家に最も高い度合で共感し，家族が誰も住んでいなかったり，到着時又は発話時にいないホームベースへの共感度は低くなるということも言えよう。

＜例 1＞…(III) (IV) は全く純粋な非関与者間の移動を表わす時にも適用できる。

(12) The men *came* into her room. (Fillmore, 1972 : 15)

(13) *The men *came* into her room and then *came* right out again. (Fillmore, 1972 : 16)

これらの例においては話し手が誰に共感をおくかは全くの自由である。これらは (I) よりも (III) (IV) の仮説によって説明される。つまりこの非関与者間の移動は，話し手がより共感している者や場所を中心に考えられ，そこへの移動であれば come，そこからの移動であれば go が用いられることがわかる。

＜例 2＞

(14) Prof. Takahashi *came*/*went to Japan Women's University after I graduated from it. (Ogura, 1978 : 88)

(15) Mr. Saito *came*/*went to the Yokohama branch after I retired from it.

これらの例では，話し手も聞き手も大学及び横浜支店に，発話時及び到着時に直接結びつけられていないと考える。それでも上記のような動詞の選択が行なわれる。これは文脈から云って話し手が非常に親近感をもっているある意味ではホームベースとも言えるべき場所への移動であるからであり，(III) (IV) が適用されることになる。

＜例 3＞…(III) を支持する最後の例は，2，で挙げた同行文の場合である。同行文とは，発話時に話し手と聞き手が同じ場所にいて，又は話ができる距離にあり（電話でもよい），話し手又は聞き手がそれ以後聞き手又は話し手にそれぞれ同行するか否かを話し合っているような文のことである。この文に特徴的なことは，いずれの対話者にとっても，話し手の又は聞き手のホームベースでもない第三者的場所への移動であるということだ。対話者は彼らから離れた場所への移動という意識が高く，更に時によっては到着点さえ明確でない場合がある。従って話し手が到着点又は，そこへの途中へ共感する度合が極めて低くなり，話し手の IFEH においては，発話時に自分達がいる場所への共感度の

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

方がずっと高くなるわけである。しかしこの傾向というのは全く固定化されるものではなく，個人及び状況によって非常に flexible なものである。従って様々の要因の統合の結果，高い度合で到着点及びその途中に共感すれば come が用いられ，彼らの居場所への共感度が高ければ go が用いられる。従ってこれも (III) の仮説によって説明できる顕著な例といえよう。

5. 3. 仮説 (V)

さてここで，前述した (6) (7) の例を思い出してみよう。これら2文は，＜例1＞ でみた非関与者的地点間の移動と言えそうだが，もしそうであれば，以下の文も容認されそうだ。

(6)′ *Mr. Saito will go to Shizuoka from Kagoshima.

(7)′ *Mr. Saito will *come* to Shizuoka from Tokyo.

ところが (6) (7) の状況に従えばは (6)′ (7)′ は不適切である。これらを説明する為に以下のような仮説がたてられる。

(V) 話し手の，移動の出発点及び到着点への共感度の相対性 (relative empathy) が，移動の動詞 come と go の容認性を決定づける。

これに基づけば，(6) (7) いずれも移動の到着点は「静岡」である。従って仮説 (III) (IV) に従がえば，これらは同じ動詞で表わされてもよいはずである。ところが実際には不適切となるのは，各文における到着点と出発点の違いに対する話し手の共感度の相対性があるからである。この話し手の共感度を表わせば，

Tokyo＞Shizuoka＞Kagoshima

ということになる。(6) では，話し手は，静岡＞鹿児島であるから，静岡が到着点になっていれば (III) (IV) から come が使用される。一方，(7) では，東京＞静岡であるから，もし come を使用すればその表わす IFEH は，静岡＞東京になってしまい，実際の話し手の IFEH と矛盾することになる。

これらの文を考える上で我々は以下の2点を明確にする必要がある。

(i) 移動の出発点，到着点と話し手のいる場所との物理的距離

(ii) 話し手の，移動者及び到着点にいる人への相対的共感度

これらを踏まえ，もう少し例を見ていこう。

＜例 1＞…まず，話し手の共感度が比較的高くなると思われる話し手及び聞き手の家族を登場させて (i) (ii) を考えてみる。

(16) My sister should *go* to visit Beth.

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

(17) Beth should *come* to visit my sister. (Ogura, 1978 : 93)

(18) Did your sister *go* to Mr. Suzuki yesterday?

(19) Did Mr. Suzuki *come* to your sister yesterday?

(16) における物理的距離の比較は，ごく普通に考えて my sister>Beth であり，一方 (ii) の IFEH も my sister>Beth となる。従って (i) (ii) が一致し，妹の Beth への移動は go で表わされる。このことは (17) をも適切に説明できる。

同様に (18) (19) においても (i) your sister>Mr. Suzuki, (ii) your sister>Mr. Suzuki となり，(i) (ii) は矛盾しないので，上記の動詞が使用されることが (III) (IV) (V) によって説明できる。これらは，

(V)′ Come は，話し手の相対的共感度において，移動者の方が低い場合使用され，go は逆に高い時に使用される。

ということになる。ところが，実際には，

(20) My sister should *come* to visit Beth. (Ogura, 1978 : 93)

(21) Did your sister *come* to Mr. Suzuki yesterday? (Ohe, 1975 : 90)

という文が適当と思われる状況もあるわけだ。(20) で言えば，妹はむしろ遠くに住み，話し手は Beth と隣り合っている状況のような場合である。これを見てみると (i) Beth>my sister, (ii) my sister>Beth,[10] 同様に (21) は，(i) Mr. Suzuki>your sister, (ii) your sister>Mr. Suzuki となる。このように (i) (ii) が相反する時には，上記の文でもわかる通り，(i)，つまり物理的近さの方が優先されることがわかる。

つまり (i) (ii) が一致する場合には，話し手が共感している人に対する移動が come で表わされ，相反する時には，(i) が優先され，物理的に近い者への移動が come で表わされる。しかしもし物理的距離という問題がない時には，(移動者も到着点にいる者も，話し手との距離の差がない場合)，話し手の相対的共感度が移動の動詞選択のファクターとなり，このことは仮説 (V) の重要性を示している。

5.4. 思考動詞，伝達動詞の補文中の come と go

先に Fillmore の分析の問題として掲げた思考及び伝達動詞の補文中の come と go に関して，もう少し厳密な原則をもちたい。

(22) *John*$_i$ thinks that Mary will *come*/?? go to *him*.$_i$ (Ohe, 1975:125)

(23) *John*$_i$ thinks that I will *come*/? go to *him*.$_i$ (Ohe, 1975:126)

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

(24) *John*$_i$ told me that Mary would *come*/*go to *him.*$_i$ (Ohe, 1975:137)

これらにおいて移動の動詞はすべて話し手の視点ではなく，思考及び伝達動詞の主語の視点で選択されるのが特徴的である。

(VI) a. 思考及び伝達動詞の文において，話し手は主文の主語に共感し，その主語の視点で補文中の移動の動詞が選択される。

ということになる。ところが，以下の文は，

(25) John thinks that Mary will *come*/*go to *me* tomorrow. Ohe, 1975 : 100)

(26) John thinks that I will *come*/??go to *you* tomorrow. (Ohe, 1975 : 101)

(27) John told me that Mary would *come*/*go to *you*. (Ohe, 1975 : 109)

この (VI a) の仮説に相反する。これらの文をよくみていくと，話し手及び聞き手が発話時及び到着時に到着点に結びつけられている。そして話し手は，自分又は聞き手の視点をとっていることがわかる。特に (26) では，移動者が話し手，到着点には聞き手が結びつけられてあり，come が選択されているということは，原則 (I) が適用されていることがわかる。これはつまり，

(VI) b. 話し手及び聞き手が到着点に結びついている時は，思考及び伝達動詞の補文中の移動の動詞の選択は原則 (I) が適用される。

6. 結　び

当論文では，移動の動詞 come と go の用法をいかに説明すべきかを追求してきた。これまでの「ダイクシス」及び Empathy 理論の根本概念を比較検討することにより，確かに言語的レベルの異なる両理論ではあるが，明らかに密接な関係があることがわかった。それらは相反するものではなく，相互補助的な役割をも任っていることは重要であり，移動の動詞の分析のみならず，授与動詞の分析，敬語の分析，法 (modality)，英語教育の面にも応用されることができるであろう。

移動の動詞の分析も，これですべての用例を完全に説明できたというわけではないが，Empathy 理論を導入して説明すると，かなりの広い範囲まで説明可能であるということがわかった。Fillmore の提示したダイクシスからの分析と相反するものではなく，これも両者の融合という型を用いると非常に有効な原則が打ち立てられる。つまり「ダイクシス」の方法の上から Empathy の方法という網をかぶせてやるわけである。そこでこれまで掲げてきた，(I)～(VI

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

b) までの仮説を，come と go の用法説明の原則としてここで正式に取り上げたい。

「ダイクシス」理論は非常に話し手中心，話し手サイドの理論であり，一方Empathy理論によって我々は，言語によるコミュニケーション行為を通じて他者の内的感情にまで入り込んだり，他者の視点を通じて物を見て，我々が直接経験できないようなことまでも言語を通じて可能にされるということも言えよう。

Come と go は中学生でも使う単語である一方，native speaker でも使用が難しいという程のものである。移動を表わすものばかりでなく，idiom としても数多くの例が掲げられる。これらに対しても今回用いた方法を利用すれば，今後更に多くの用例の説明に役立つと思われる。

注

*当論文は1981年1月に，日本女子大学文学研究科英文学専攻博士課程前期の修士論文として提出したものを再検討したものである。

1) 当論文における例文は，容認性，文法性が既に正確に測られているものであるという理由から，殆んどのものは既成のものを利用し，再分析したものである（出：Fillmore, Ogura, Ohe, Mohri)

2) M. Ogura, "*Roles of Empathy in Japanese Grammar*". 1978年にイリノイ大学に提出された博士論文。当論文における以下 Empathy 理論及び come と go の「共感」よりの分析はこの Ogura 氏に基づいた。但し，Ogura 氏の分析は日本語を中心としたものであるため，英語分析に必要な修正，追加を行なった。

3) Kuno & Kaburaki によれば，この感情焦点は，I と Mary の2つになり，「1文中に相矛盾する感情焦点があってはならない」という原則から，この文は容認されないという結果が出てしまうが，実際には容認されうる。

4) 主語ではMary，与格では his つまり Mary の夫に焦点が当たっており，これも相矛盾する焦点が一文中に存在してはいるが実際には容認可能な文である。この点に関して Kuno & Kaburaki は「相互融合的な感情焦点」としているが，Ogura はこの説明の不明確さを指摘している。

5) 本来共感度は，主格＞与格が普通であるが，本質的にこれとは逆の性質をもつ動詞がある。そのような動詞のことである。日本語では「くれる」「もらう」，英語ではまさに come がそれである。

6) De Villiers, P. et al. in C. Tanz.

7) 日本語と一番異なる点である。

8) 発話時及び到着時に話し手も聞き手も，到着点，つまり話し手のホームベースにいない場合。たとえば，話し手やその家族が家から遠く離れている，つまり，東京に家があり，話し手及びその家族はシカゴにいる，というような場合。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

9) 特別な状況ではなくごく自然に考え，(20) では Beth はただ隣りに住んでいる人，(21) でも Mr. Suzuki と話し手は何ら特別な関係（恋人など兄弟姉妹以上の気持ちを持つもの）ではないと考える。

Bibliography

Clark, Eve V. "Normal State and Evaluative Viewpoints," *Language* 50, 1974. pp. 316–332.

Clark, E. V. and Garnica, O. "Is He Coming or Going? On the Acquisition of Deictic Verbs," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 13, 1974. pp. 559–572.

Fillmore, Charles J. "Deictic Categories in the Semantics of 'COME'," *Foundations of Language* II, The Ohio State University, 1966, pp. 219–227.

———. "How to Know Whether You're Coming or Going," *Descriptive and Applied Linguistics* V. Tokyo: International Christian University, 1972. pp. 3–17.

———. "Coming and Going," Lecture Delivered at the University of California at Berkeley, 1973a?.

———. "May We Come in?" Lecture Delivered at the University of California at Berkeley, 1973b?.

Kuno, Susumu. "Three Perspectives in the Functional Approach to Syntax," *Papers from the Functionalism Parasession.* Chicago Linguistic Society, 1975. pp. 276–336.

Kuno, S. and Kaburaki, E. "Empathy and Syntax," Linguistic Inquiry, 8 : 4, 1977. of Relativization Phenomena," in C. Li. (ed.), *Subject and Topic,* University of Texas Press 1976. pp. 431–444.

Kuno, S. and Kaburaki, E. "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry,* 8 : 4, 1977 pp. 627–672.

Lyons, John. *Semantics* 2, Cambridge University Press, 1977. pp. 637–724.

Ogura, Masako. *"Rules of Empathy and Rules of Grammar,"* Unpublished Ph.D. Dissertation, 1978.

Tanz, Christine, *Studies in the Acquisition of Deictic Terms.* Cambridge University Press, 1980.

大江三郎，『日英語の比較研究』，南雲堂，1975。

久野 暲，『談話の文法』，大修館，1978。

毛利可信，『英語の語用論』，大修館，1980。

安井 泉，「Come, go と「くる」，「いく」—「共感」と「ダイクシス再編成—」筑波大学言語文化論集第6号，1979。

（日本女子大学付属高校）

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

EMPATHY and DEIXIS
—With Special Reference to 'Come' and 'Go'—

Yoko MURAZUMI

A part-time teacher
at Junior High School attached to Tsukuba University
and
at Senior High School attached to Japan Women's University

The motion verbs "come" and "go" have been given explanations in both deictic and empathetic frameworks of research. However, when we look at the uses of these two verbs in greater detail, we find that these explanations are not complete. In this paper I have tried to find the most appropriate and available explanation that can account for every kind of use.

First of all, we examine the deictic analysis of these verbs done by Fillmore and deal with several problems in this analysis.

Secondly, we compare the concepts of empathy and deixis. By deixis, we found that languages are produced by a very speaker-centered or egocentric point of view. By empathy, we found that language permits partial access to other people's inner states through linguistic communication and that information available through language compensates for the impossibility of directly experiencing the other person's point of view.

Through this comparison, we propose that the uses of the motion verbs are most appropriately explained by the concept of empathy. Therefore, we re-examined and analyzed many sentences with "come" and "go" from the empathetic point of view and proposed several principles which make it easy to grasp the characteristics of the verbs

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

and to present the most suitable way of teaching them to the non-native speakers.

The linguistic devices from the viewpoints of empathy and deixis are certainly different. However, both concepts are closely connected, and these are not incompatible but complementary. Therefore, this method of empathetic analysis related to deictic analysis is applicable not only to the analysis of motion verbs, but to the analysis of giving verbs, honorific forms, modality, and for English teaching.

NII-Electronic Library Service